

日本赤十字社会員誌  
クロスコムブック  
vol.1 [創刊号]

# com-BOOK



©Atsushi Shibuya/JRC

## 新型コロナウイルス感染症と赤十字

コロナ禍での各地の赤十字活動  
ウィズ・コロナ時代を生きていくために  
コロナ禍における赤十字の国際活動

令和2年度決算概要 / 令和3年度予算概要



日本赤十字社会員誌  
Cross com-BOOK  
vol.1 [創刊号]

日本赤十字社会員誌 Cross com-BOOK [クロスコムブック] 令和3年7月1日発行 第1号  
日本赤十字社 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3437-7081 <https://www.jrc.or.jp>

赤十字の最新情報を、SNSでチェック!



会員誌の創刊に寄せて

# 新たな出合いとなることを願って

日頃から、赤十字事業に格別のご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。  
皆さまは、どのようなきっかけで赤十字と出合い、この会員誌の創刊号を手にとったのでしょいか。

自治会での活動資金募集や災害時の義援金への協力、あるいは通っていた学校での青少年赤十字がきっかけだった方もいらっしゃるかもしれません。いずれの場合も、私は、皆さまが赤十字と出会ってくださったことに、感謝するばかりです。

## 私の赤十字との出合い

私が、縁あって日本赤十字社の仕事に就いたのは、平成17(2005)年4月のことでした。その年、愛知県で万国博覧会「愛・地球博」が開催され、日赤もパビリオンを出展しましたが、100以上はある数多くの巨大なパビリオン群の中で、「国際赤十字・赤新月館」は、まぎれもなく最小のもの

月の横浜港クルーズ船内への医療チームの派遣に始まり、現在においても、全国の赤十字病院では、きわめて厳しい環境の下で、人々の命を守り、地域の医療を支えるために、医療スタッフたちが日々奮闘しています。また、血液

事業も一刻たりとも業務の停止は許されず、日赤はその責任を一身に担っています。  
ボランティア活動や青少年赤十字活動、救急法等の講習

のでした。

ところが、その小さなパビリオンの評判が次第に口コミで広まり、日を追って来館者が増え、当時、万博事務局が毎日公表していた、いわば「人気パビリオン・ランキング」で、何度もトップとなりました。終わってみれば、半年の開催期間中の入場者数約47万人という記録を打ち立て、最も人気の高いパビリオンの一つとなったのです。

これが、私と赤十字との衝撃的とも言える「出合い」でした。さまざまな工夫を凝らしたパビリオンがある中で、華やかな要素など何もなく、控えめな赤十字パビリオンが、なぜ若者を含む多くの人々を惹きつけたのでしょうか。

それは、「苦しんでいる人々を見過ごせない、手を差し伸べたい」「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という赤十字の簡素で力強い理念が、一人ひとりの心を揺さぶり、人種や文化や地域を問わず、時代をも

などについても、懸命に創意工夫をこらし、さまざまな新たな活動が生まれています。このように、140年を超える歴史を有する日赤は、時代や環境に呼応して、現代まで脈々とその活動をつないできたのだと、先人たちの地道で力強い努力を改めて実感させられています。

## 新たな出合いとなることを願って

こうした活動の礎は、何といたしても、

超えて、広い共感を呼んだからではないかと思えます。

## 日赤の新型コロナウイルスとの戦い

この「出合い」から15年以上が過ぎ、世界は急速に変わりつつあります。東日本大震災もその代表例ですが、大きな自然災害が毎年のように発生し、加えて昨年初めから世界中で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るいました。

季節はこれまでと変わりなく移り行き、それぞれ美しい風景を私たちに見せてくれます。しかし、未知の感染症によってこれほど多くの人々が命を失ったり健康を損なうことになるとは、また、私たちの社会も日々の生活も急激な変容を迫られることになろうとは、とても想像できません。

この困難に対し、日本赤十字社は、当初から総力を挙げて取り組みました。昨年2月、赤十字に対して温かい励ましや、さまざまな形でご支援いただく皆さまの存在です。時代の変化はますます加速し、それに伴い、私たちが取り組むべき課題もさらに広がりを見せています。私たち赤十字は、国民の皆さまから「救うを託されている」団体であるということを信念として、柔軟な発想に立って考え、多くの課題に果敢に対応していかなければなりません。

このたび、赤十字の活動を支えてくださる皆さまに対し、そのご支援がどのような活動に結びついているかをお伝えするとともに、皆さまからのメッセージを掲載するなど、皆さまと赤十字をつなぐものを目指し、会員誌「Cross com-BOOK」(クロスコムブック)を創刊いたしました。すでに赤十字と出会ってくださっている皆さまにとって、本誌が、また新たな出合いになりますことを願っております。



日本赤十字社 社長  
おおつかよしほる  
**大塚義治**

東京大学法学部卒。厚生省老人保健福祉局長、厚生労働省保険局長、厚生労働事務次官を経て、平成16(2004)年7月退官。平成17(2005)年4月に日本赤十字社副社長に就任し、学校法人日本赤十字学園理事長を兼任。令和元(2019)年7月より現職。

2 会員誌の創刊に寄せて  
 4 会員の皆さまからのメッセージ / contents  
 6 特集1 新型コロナウイルス感染症と赤十字  
 10 特集2 コロナ禍での各地の赤十字活動  
 14 特集3 ウィズ・コロナ時代を生きていくために  
 16 令和2年度決算概要 / 令和3年度予算概要  
 18 支援者の声  
 20 赤十字スタッフからのメッセージ  
 22 特集4 コロナ禍における赤十字の国際活動  
 26 支部活動情報  
 27 紺綬有功会のご紹介  
 28 INFORMATION (大阪・関西万博 / 東日本大震災から10年プロジェクト)  
 29 あなたの声をお聞かせください  
 30 ご寄付について

## 「Cross com-BOOK」とは…

赤十字をご支援くださっている方々には、これまで各都道府県支部から情報誌等をお送りしておりましたが、このたび「会員誌」を創刊し、会員の皆さまに定期的にお届けすることといたしました。皆さまから寄せられたご寄付がどのように社会課題の解決につながったのか、ていねいに説明させていただきたいと考えております。

### 会員誌の名称「Cross com-BOOK」に込めた想い

接頭辞「com-」は、communication(情報交換)、commit(託す、引き受ける)、companion(仲間)など、「ともに(together)」という意味を持ちます。これは、赤十字が皆さまから託された想いを胸に、社会課題の解決を目指すという意味を表しています。

#### 会員の皆さまからのメッセージ

「会員誌」を創刊するにあたって実施したサンプル調査において、赤十字へのイメージやメッセージが寄せられ、会員誌の名称の参考にもさせていただきました。多くのご協力、ありがとうございました。一部をご紹介します。

#### 日赤への message

私は日赤さんに何回も命を助けていただきました。いつも感謝しています。

#### 日赤への message

日本では毎年のように災害が起きていて不安になります。そんな中どんな所にも赤十字のマークを背負った救護班が出動されていて本当に感謝します。勇気ある行動にいつも感動します。

#### 日赤の image

地道なボランティア活動を行っているイメージ

#### 日赤の image

シンプルで奥深い団体

#### 日赤の image

非日常における最大の味方

#### 日赤の image

たすけあう、つながる、ささえる

# 新型コロナウイルス感染症と赤十字

日本赤十字社は新型コロナウイルス感染症の治療と感染拡大防止のための活動に取り組んでいます。全国の赤十字病院だけでなく、コロナまん延下の災害救護など、活動内容は多岐にわたっています。

## 国内の新型コロナウイルス感染拡大状況と赤十字の取り組み

治療、災害救護……、活動は多岐にわたる

2020年1月16日、国内初の感染者の発表があると、日赤の動きは早かった。たとえば、感染症専門医・古宮伸洋が所属する日赤和歌山医療センターでは、感染防護服の補充、院内マニキュアの策定、各科の体制見直しと強化に着手。感染拡大に備え、1月下旬には完了した。2月に入ると、感染者が多発して横浜港に入港した大型クルーズ船や、武漢市からの帰国者の一時滞在施設へ日赤救護班を派遣。延べ255人の派遣者

から一人も感染者を出さずに活動を完遂させた。令和2年7月豪雨災害では、コロナ禍の中、感染予防に細心の注意を払って被災地を支援。現地支部内に赤十字のボランティアセンターを開設し、防災ボランティアが延べ500人以上活動した。終わりが見えない中で、最前線に立って感染者の治療にあたる医療現場、教育現場での啓発……、多岐にわたる活動は今も続いている。

### 中国武漢市からの帰国者一時滞在施設への救護班派遣



赤十字病院18施設から派遣  
派遣職員数延べ113人

### 令和2年7月豪雨災害(熊本豪雨)での被災地支援



感染予防策に細心の注意を払って被災地支援を実施  
活動人数延べ836人

### 2021年5月変異株急増緊急事態宣言さらに延長へ



感染力が強いとされる変異株の流行懸念、医療供給体制に厳しい状況が続き、5月末宣言は再び延長へ

### 大型クルーズ船に日赤救護班を派遣



赤十字病院28施設から派遣  
派遣職員数延べ142人(救護班67人/DMAT 75人)

2020年5月25日  
全国で宣言解除

2020年5月14日  
39県で宣言解除

2021年1月8日  
1都3県に2回目の「緊急事態宣言」

2021年1月13日  
7府県にも「緊急事態宣言」

2021年4月25日  
4都府県で3回目の「緊急事態宣言」

2021年2月17日  
国内でワクチン接種開始

2021年2月28日  
首都圏以外の宣言解除

2021年3月21日  
1都3県の宣言解除



# コロナ病棟最前線から

新型コロナウイルス感染症の指定病院として、初期からコロナ患者の対応に当たってきた東京の武蔵野赤十字病院。その日々は医療従事者に何を突きつけてきたのか。第3波の最中の記録をレポートする。



患者には高齢者が多く、必然的に介護が必要な方も

新型コロナウイルス感染症の症状が現れてから10日(重症者は20日)たち、かつ平熱になるなど、医師の判断で回復が認められれば、一般病棟での受け入れが可能ながわかってきた。東京都には約10万床のベッドがあり、新型コロナウイルスの患者を収容していないその1割程度でも受け入れ、うまく連携・運用できればキャパシティはまだまだあるはずだ、と原田部長は言う。「現場の医療従事者は医療崩壊などと絶対に言えないし、言うべきではない。新型コロナウイルスの正体もわかってきた今、過剰に恐れることなく工夫を重ねていけば、必ず乗り切れると信じています」

## 最前線からの声 #1

武蔵野赤十字病院 新型コロナウイルス専用病棟  
ふるさわきょうこ  
**古澤恭子** 看護師長 (取材当時)



正月後から患者数が増え、長い自粛生活の果てに入院というストレスもあってか、ひどい暴言を投げつける患者さんもいて、これまで使命感でやってきたスタッフも、かなり心配な状態です。終わりが見えない状況で、いつ割れるかわからないガラスの上を一歩ずつ踏みしめているようで、早急に心のケアが必要です。

## 最前線からの声 #2

武蔵野赤十字病院 救命救急センターHCU(高度治療室)  
みやもとかなこ  
**宮本加奈子** 看護師長



新型コロナウイルスでは75歳以上の高齢者、かつ基礎疾患のある方は人工呼吸器が必要となるケースが多いです。元々体力が落ちている方が一度つけると、一生、外せなくなってしまいうリスクもあるので、人工呼吸器を本当に望むかを毎回、確認しますが、ご家族にとってもつらい判断を聞くことになります…。

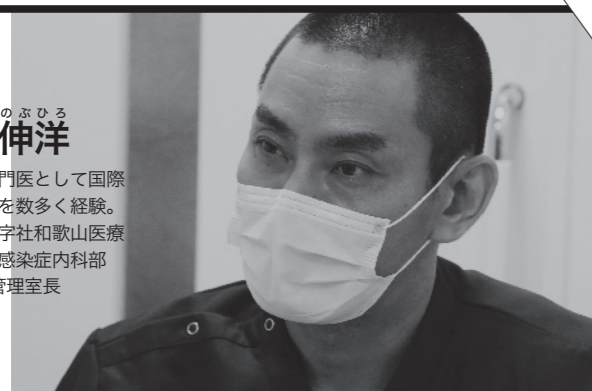


コロナ病棟では病棟全体がレッドゾーンとなり、病棟内では原則として防護服とN95マスクを着用して作業する

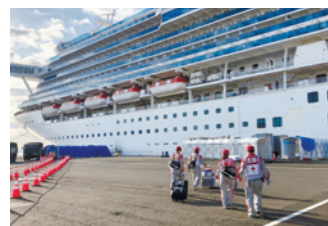
## 国内発生早期から、感染拡大期、まん延期を通じて 感染症専門医の立場から

こみやのぶひろ  
**古宮伸洋**

感染症専門医として国際医療救済を数多く経験。日本赤十字社和歌山医療センター感染症内科部長、感染管理室長



「巧妙なウイルスだ」。新型コロナウイルスを古宮伸洋医師はそのように言う。感染の広がりやすさに長けているのだ。軽微な風邪症状や無症状の状態でも感染する。いかに早く兆候をつかみ、広がりを抑える対策を取るかが重要となる。そのためには、3密にならず、ソーシャルディスタンスを保ち、しっかりマスク着用や手洗いをする。それが広がり、その効率は低下させる。社会全体の取り組みで、この危機を乗り越えていければ、と考える。



横浜港に入港した大型クルーズ船に、日赤医療救護班は延べ142人を派遣した



いち早く感染拡大に備えた日赤和歌山医療センターの病室に立つ古宮医師

新型コロナウイルスとの戦いは「人道」の問題だ

新型コロナウイルス専用病棟の古澤恭子看護師長は、第1波の最中、初めて新型コロナウイルスで亡くなられた患者さんのお見送りの光景が頭から離れないという。「遺体は滅菌のバイオシールに包まれてお顔も見えず、ご家族も会えない。せめて出棺する車を院外で見送れるよう、車の出る時刻と通る場所を3人の息子さんにお伝えしました」  
「最期のときに家族に会えない、これは人道の問題であり、看護するスタッフにとっても大きなストレスだ。その後手を尽くし、武蔵野赤十字病院では、お見送りの際に家族に防護服を提供してお別れの機会を設けるようにした。亡くなるかもしれない患者さんには、5分だけでも家族が会える体制を整えた。」  
一方、感染流行の第3波が到来し、市中感染が広がった中で、医療の逼迫が叫ばれていた。だが、救急救命科の医師・原田尚重部長は、そうは考えていなかった。1年たつてわかってきたことも多く、工夫の余地があったからだ。

# コロナ禍での各地の赤十字活動

## 被災地の声



### 熊本県

高齢者も多く、避難所では不安を抱える方も。救護班は一人ひとりに寄り添って対応しました。



たかはしやすお  
高橋康夫さん  
(仮名・86歳)

「あまりに急だったので、妻の遺影だけ持って避難しました。妻は昨年7月に亡くなり、もうすぐ一周忌で集まろうと予定していたのに、こんなことになるなんて…。日赤のお医者さんが来てくださったので、診察していただきました。助かりました。ありがとうございます」



みやはらよしこ  
宮原芳子さん  
(71歳)

「水害が多い場所だから、家を建てたとき土台を高くしていたのに水が入ってきた。71年人吉に住んで、こんなひどい水害は初めて。片付けをしていたら長靴の中に水が入りこみ、足に擦り傷もできて、真っ赤に腫れちゃって。お医者さんに診ていただいて安心しました」

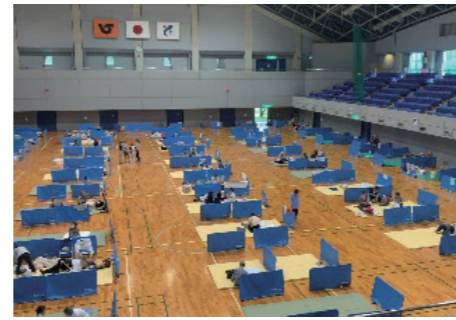


つちや  
土屋イツエさん  
(85歳)

「水がいきなり来ました。どんどんかさが増して、もう助からないと思って、紙にみなさんもう最後ですと書いたの。でも、何とか助かりました。今日は足がキリキリ痛かった。不安だったけれど、お医者の方に診てもらえてよかったです。今夜は安心して眠れそうです」



配布する救援物資に不備がないように、救護倉庫で手分けをしながら点検を行った



避難所では間隔を広くしたスペースづくりにより新型コロナウイルス感染症対策を講じた

もこまめに消毒。また被災地ではマスク・ビニール手袋・ウエットティッシュなど感染予防に有効な衛生用品を含んだ緊急セットの要望が高まり、被災地各支部の備蓄に加え、本社備蓄品の配布も行いました。

一方、被災した各地では、新型コロナウイルス感染症の影響により他県ボランティアを受け入れない方針に。災害復興は県内ボランティアの肩に委ねられました。赤十字のボランティアセンターでは、支部で備蓄していた救援物資の積み込みなど精力的に活動を開始。配布する救援物資に不備がないように、仕

分けやパッキングの作業を行いました。県内各地の地域赤十字奉仕団は、タオル収集や災害ボランティアセンターへの運営支援にも参加。赤十字飛行隊熊本支隊も被害の大きい事業所からの要請に応じて支援に駆けつけ、それぞれが自発的な活動を展開しました。

県外だけでなく町外のボランティアも受け入れなかったあさぎり町で活動した球磨郡地域奉仕団の尾曲恵子委員長は、「やっぱり赤十字奉仕団ですから、何かあったらお助けしたいって気持ちでいっぱいなんです」と語りました。



## KUMAMOTO

case: 1 | area: 熊本 | support: ボランティア

赤十字のボランティアセンターに集まった仲間とともに、救援物資の積み込み作業などを精力的に展開

コロナ禍の厳しい状況下でも被災地支援を展開

2020年7月、西日本から東日本にかけて広い範囲を「令和2年7月豪雨災害」が襲いました。7月3〜8日に九州を襲った豪雨では、河川の氾濫が相次ぎ、新型コロナウイルス感染症への不安を抱える中で、被害は九州全域に広がりました。

日赤救護班は球磨川の氾濫により甚大な被害のあった熊本県・人吉市を中心に、発災直後の7月4日から活動を開始。熊本県支部では、同日支部内に赤十字ボランティアのためのセンターを開設しました。

救護活動は、感染予防策に細心の注意を払って実施。救護班は新型コロナウイルス感染症対策として全要員がサージカルマスクを着用、一人1つずつ消毒薬を携行してその都度手指を消毒し、使用する資機材や移動車

### それぞれがまずやれることを

#### support: 地域奉仕団

八代市地域奉仕団は、スタッフが不足した同市災害ボランティアセンターの運営を支援。「食中毒の不安がある」と行政から炊き出しは止められましたが、困っている人がいるのにじっとしてはいられません」



#### support: 救急奉仕団

救急奉仕団の堀徹男さんはボランティアの活動場所を巡回。熱中症予防や応急手



当に尽力しました。暑さの中、被災家屋の清掃作業は過酷。救急法指導員の知識とスキルを生かし、危険から命を守りました。

#### support: 青年奉仕団

熊本県青年赤十字奉仕団委員長・沼川晃範さんは、職員も少ない中、被害情報の収集や関係機関との連絡のサポートに。学生中心の同団は、夏休みを利用して被災家屋の清掃ボランティアにも参加しました。





日本と17の姉妹社から500人以上が参加

## GLOBAL

case : 3 | area : 日本×世界 | support : WEB 国際交流

50年の歴史上初のWEB国際交流集会を実施。日本と17の姉妹社から500人以上が参加

日本赤十字社の青少年赤十字事業では、国際理解・親善を深める活動として、日本の青少年赤十字高校生メンバーとアジア・大洋州姉妹社のユースが参加する国際交流を実施しています。2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大を受け史上初めてのWEB開催となり、11月15日(日)に実施しました。プログラムでは、各都道府県や各国の文化紹介、青少年赤十字の活動の紹介、赤十字〇×クイズや、ガイド「3つの顔」(14・15ページで詳しく紹介しています)をもとに、新型コロナウイルス感染症にどのように向き合うか、またそれに付随する偏見や差別をなくすためにはどうしたらよいか等の意見交換を行い、今後の活動を考えました。

世界のコロナ禍の現状や、偏見のない世界を作るために青少年ができることについて意見交換  
世界を取り巻くコロナの現状について情報共有を行ったところ、



## HOKKAIDO

case : 2 | area : 北海道 | support : 医療活動

知的障害者施設のクラスターを食い止める!

2020年4月中旬、福祉施設「向陽園(北海道紋別郡)で、園外の病気治療から戻った入所者が新型コロナウイルスに感染。園内に感染が広がりました。同園は、知的障害、発達障害のある方が暮らす障害者支援施設です。

PCR検査の結果、最初に陽性が判明した5人のうち1人は施設に常駐する看護師でした。「看護師不在で職員の不安もピークに達しました。食事や排泄などの生活支援は私たち職員がやりますから」と語るのは工藤克哉施設長。知的障害、発達障害のある方は一般病院への入院が難しいため、重症化していない陽性者は園内で看護する必要があります。職員は発熱などの症状がある入所者の隣室に泊まり込んでサポートしましたが、職員だけで看護を続けるのは徐々に限界を迎えていました。

向陽園でのクラスター発生の一報を聞き、北見赤十字病院の荒川穂二院長は、オホーツク圏にある(置戸赤十字病院)へ小清水赤十字病院)に



入所者の部屋を回って往診する日赤の医療チーム

も呼び掛け、医療チームを結成しました。「障害のある方の入院は、多くのストレスを与え、状態を悪化させる心配があります。だから園内でコロナを抑え込み、命を守らなくてはならない。赤十字には『全ては被災者のために』というキーワードがありますが、向陽園での医療活動は自分たちがやるべき仕事、と感じました」と荒川院長。

向陽園での活動は4月29日から5月31日まで行われました。医師・看護師が入所者一人ひとりに往診を行い、常に2人の看護師が2泊3日交代で活動を継続。発熱があれば即PCR検査を実施し、薬剤師の管理のもと薬を処方。入所者約50人のデータを電子カルテに登録し、新たな発生にも備えました。

日本と海外の共通点と違いが明らかになりました。

また、参加者はコロナの現状を踏まえ、今できる活動について考えました。感染や健康状態に不安を感じている人に、寄り添うところを持つこと。誰にでも感染する可能性があることを知ることにより、差別をなくすこと。また、SNSの間違った情報をうのみにしないよ

<p><b>《共通点》</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オンライン授業が行われていたが、最近は生徒を半分に分けて登校(韓国)</li> <li>学校での屋食の時間がなく帰宅。学校行事もキャンセル(インドネシア)</li> <li>地域では、感染に関する「うわさ話」を聞くようになった(日本)</li> <li>学校では「密」にならない生活に神経を使っている(日本)</li> </ul>
<p><b>《相違点》</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>内戦が続き、政情が不安定。財政不足等によりコロナ対応がとても難しい(ミャンマー)</li> <li>マスク着用を義務付けている(インド)</li> <li>マスク着用は警察が見守っている(東ティモール)</li> </ul>

## もしものときは!? コロナ禍における一次救命処置

傷病者と救助者、すべての人に「感染防止」対策を!

コロナ禍でも人命を救うため、できる限り感染防止に努めながら一次救命処置を実施できるよう、基本的な指針をお伝えします。心肺蘇生ではエアロソルを発生させる可能性があるため、すべての心停止傷病者に感染の疑いがあるものとして対応します。ポイントは、傷病者に顔を近づけすぎないこと、人工呼吸ができる場合でも成人には行わないことです。万が一の事態に遭遇しても、以上のことを忘れずに落ち着いて対応しましょう。



救急隊に引き継いだあとは、速やかにせっけんと流水で手と顔を十分に洗います。傷病者の鼻と口にかぶせたハンカチやタオルなどは、直接触れないようにして廃棄するのが望ましいです。

※厚生労働省「新型コロナウイルス感染症の流行を踏まえた市民による救急蘇生法について(指針)」(2020年5月)を基に作成していますが、新しい知見や感染の広がりなどによって変更される場合があります。また、本記事の内容は「赤十字救急法」の講習内容の変更をお知らせするものではありません。

うにし、正しい情報を得てポジティブな情報を伝えていくなど、SNSとの付き合い方についても話し合われました。

青少年赤十字のオンライン活動を振り返って

今回はオンライン開催であったため、いつもより多くの方々が国際交流に参加でき、事後アンケートでは満足度が9割を超えました。参加した青少年赤十字メンバーからは、「オンラインでも世界の人々と一緒に楽しむことができた。短い時間でプレゼンを準備し、英語で伝えるのはとてもいい経験になった」「コロナによる偏見についてこんなにも考えたことがなかったけれど、本当は世界中の誰もが考えなければいけないものだと感じた。今後、自分を含め周りの人たちと考えるきっかけを作っていきたいと思う」などの声が寄せられました。

今後も、日本の青少年赤十字メンバーが赤十字の世界性を感じ、国際理解・親善を深めることを通じて赤十字運動の将来の担い手を育成していきます。



各国・各都道府県での青少年赤十字活動について発表するほか、赤十字に関する〇×クイズでコミュニケーションを図るなど、オンライン上でも活発な交流が行われた